**〔解　説〕**

　宝暦十二（一七六二）年九月、竹本座で初演。奥州の伝説「善知鳥(うとう)」や「黒塚」を取り入れ、近松半二、竹田和泉、竹本三郎兵衛らが書いた時代物。八幡太郎義家の奥州攻め（前九年の役）で滅ぼされた安倍頼時の遺子、貞任(さだとう)、宗任(むねとう)兄弟が復讐をはかる苦心を描いている。もとの形は五段物であるが、五段目が上演されたのは、初演時と翌年正月だけである。眼目は三段目「環宮明御殿(たまきのみやあきごてん)」で、特に、盲目の袖萩が歌にのせて両親に不孝を詫びる場面は「袖萩祭文(そではぎさいもん)」と呼ばれ、有名。

**〔三段目あらすじ〕**

　傔仗直方(けんじょうなおかた)の娘袖萩は、父に背いて浪人と不義をしたため勘当され、前九年の役の後、夫に離れ流浪の末に盲目となり、娘お君と朱雀堤で乞食になっている。通りかかった傔仗は、偶然それが勘当した娘だと知る。袖萩の方も、傔仗の家来の言葉から父が今迄ここに居て、皇弟の環の宮の行方が知れないという難儀に会っていることを知り、娘を伴い環の宮の御殿へと向う。

傔仗は環の宮を守護する立場だが、宮が誘拐されてしまい、行方を探している。義家に嫁している袖萩の妹の敷妙は、夫の使者として御殿へやって来て、宮の行方が知れない時は義家の役目として敵味方となる旨を伝える。そこへ思いがけなくも義家が現れたので傔仗は全て安倍一味の仕業ではないかと考えを述べる。義家も、瑞祥の鶴を殺した咎で捉えられていた南兵衛を引き出し、安倍宗任であろうと問いただすが白状しない。

折から傔仗の見舞に来た桂中納言則氏（実は安倍貞任）と南兵衛（宗任）は、それとなく兄弟の再会をし、源氏調伏を約する。

**〈袖萩祭文の段〉**雪の降りしきる中、御殿にたどり着いた袖萩は、祭文に託して不孝をわび、娘お君に会ってほしいと願う。袖萩の夫が貞任であることを知った傔仗は、敵方の妻となった娘とはなおさら会われぬと、雪の中に母娘を置き、家に入る。

傔仗は環の宮を敵に奪われた責めを負って切腹。袖萩も宗任から、敵の源氏方である父を討てと渡された懐剣で自害する。則氏は実は貞任がなりすましていたことを義家に見破られ、謀も失敗に終ったと悔やむ。義家は兄弟に、勝負は戦場でと約し別れる。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**袖萩祭文の段**

立って入りにける

たださへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の縁、不憫やお袖はとぼ〳〵と親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ親は子を杖子は親を、走らんとすれど、雪道に力なく〳〵辿り来て、垣のに、

「アヽ嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」

「イヽエ門口に侍衆が、居睡ってゐやしゃった間に」

「ヲヽ賢い子ぢゃ、傔仗様はこの春から主のお屋敷にはござらず、この宮様の御所にと聞いて、どうやらかうやらこゝまで来ごとは来たけれど、ご勘当の父上母上様、殊に浅ましいこの形で、誰が取り次いでくれる者もあるまい、お目にかゝってご難儀のやうすがどうぞ聞きたや」

と、探れば触る小柴垣

「ムヽこゝはお庭先の枝折門、戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い、この垣一重がの」

門より高う心から、泣く声さへも憚りてに、喰ひ付き泣きゐたり。傔仗はかくとも知らず

「垣の外面に誰やら人声、アレ女どもはをらぬか」

と、云ひつゝ自身庭の面、外にはそれと懐かしさ、恥ずかしさもまた先立って、ふ袖萩、知らぬ父、明けてびっくり戸をぴっしゃり

「なんのご用」

と腰元ども、浜夕も庭に立ち出でゝ

「傔仗殿なんぞいの」

「イヤなんでもない、見苦しいやつがうせをって、腰元ども追ひ出せ、婆、あんなもの見るものでない、こっちへお来やれ〳〵」

と夫の詞は気も付かず

「マなにをきょと〳〵云はっしゃる、犬でも這入りましたか」

と、なに心なく戸を開けて、よく〳〵すかせば娘の袖萩、はっと呆れてまたばったり、娘は声を聞き知れど『母様か』とも得も云はず、母は変りし形を見て胸一杯に塞がる思ひ、押し下げ〳〵

「定めない世といひながらテモさても〳〵〳〵思ひがけもない」

「コレ〳〵婆なに云やる」

「イヤさあやっぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め、親に背いた天罰で目もつぶれたな、神仏にも見離され、定めて世に落ち果てゝをらうとは思ふたれど、これはまたあんまりきつい落ち果てやう、今思ひ知りをったか」

と、よそに知らすも涙声、やうす知らねば腰元ども

「さっても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、お庭先へむさくるしい、とっとと出や」

とせり立てられ

「ハイ〳〵ハアイどうぞご了簡なされてマちっとの間」

「ハテしつこい」

と女中の口々

「ヤレ待ってくれ女子ども、ヤイ物貰ひ、おが欲しくばなぜ歌を歌はぬぞ、願ひの筋もなんなりと、歌うて聞かせ」

と夫の手前、ちっとの間なと入れたさ

「あい」

とは云へど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引きかへて、露命をつなぐに、皮も破れし三味線の

「ばちも慮外も顧みずお願ひ申し奉る。

〽今の、憂き身の、恥づかしさ、

　父上や母様のお気に背きし報ひにて、

　二世のにも、引別れ、

　泣きつぶしたる、目なし鳥、

　二人が中のコレ、このお君とて、

　明けてやう〳〵十一の、

　子を持って知る、親の恩、

　知らぬ祖父様祖母様を、

　慕ふこの子がいぢらしさ、

　不憫と思し、給はれ」

とあと歌ひさし、せき入る娘、孫と聞くより浜タが飛び立つばかり戸の透間、抱き入れたさ縋りたさ、祖父も変らぬ逢ひたさを、隠してわざと尖り声

「ヤアかしましい小唄聞きたうない、女子どもも奥へいて、お客人についてゐよ、サ皆行け〳〵、サア奥こちへ、 ハテぐづゝかずとはよおぢゃれ」

と、鋭い詞にせがまれて、母もぜひなく立って行く。

「なうコレ暫し、もう逢はうとは申しませぬ。お身の難儀のその訳をどうぞ聞かして下さりませ、申し〳〵」

と、伸び上り、見れど盲の垣覗きはや暮れ過ぐる風につれ、折からしきりに降る雪に身は濡鷺の芦垣や、中を隔つる白妙も

「天道様のお憎しみ、受けしこの身は厭はねど、やうす聞かねばなんぼでも、去なぬ〳〵」

と、泣く声も嵐と、雪に埋もれて

「聞こえぬ父」

と恨み泣き、次第、々々に降り積る、寒気にも冷えきれば、持病の癪の差込んで、かっぱとべば、お君はうろ〳〵、さする背中も釘氷、涙片手にわが着物、 一重を脱いで母親に、着せてしょんぼり白雪を、すくふて口に含ますれば、やう〳〵に顔を上げ

「ヲヽお君もうようござる、このまた冷えることわいの、そなたは寒うはないかや」

「イエ〳〵私は、温うござります」

「よう着てゐやるか、ドレ〳〵、ヤアそなたはこりゃ裸身、着る物はどうしやった」

「アイあんまりお前が寒からうと思ふて」

「ヘッエ親なればこそ子なればこそ、わしがやうな不孝な者がなにとして、そなたのやうな孝行な子を持った。これも困果のうちかや」

と抱きしめ〳〵泣く涙、堪へかねて垣越しにひらりと浜タが

「さっきにから皆聞いてゐる、儘ならぬ世ぢゃな、町人の身の上ならば、若い者ぢゃものいたづらもせいぢゃ、そんなよい孫産んだ娘、ヤレでかしたと呼び入れて、聟よ舅といふべきに、抱きたうてならぬ初孫の顔もろくに得見ぬは、武士に連れ添ふ浅ましさと諦めて去んでくれ、ヨ、ヨ」

と云ふうちに

「奥浜タ」

と呼ぶ声に

「アイ〳〵そこへ参ります、娘よ孫よもうさらば可哀の者や」

と、老いの足見返り〳〵奥へ行く。